

平江城関方言の指示詞について

メタデータ	言語: ja 出版者: 東京外国語大学地域文化研究科・外国語学部記述言語学研究室 公開日: 2018-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 張, 盛開 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00025085

平江城関方言の指示詞について

張 盛開

(東京外国語大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員)

キーワード

平江城関方言、指示詞、現場、照応、非照応

1. はじめに

平江城関方言とは湖南省平江県内で広く使用されている方言である。平江方言は大きく城関、東北郷、西郷、岑川の4つの方言地域に分けられるが、そのうち、岑川は湘方言の下位方言で、城関、東北郷方言は贛方言の下位方言である(湖南省地方志編纂委員会編 2001:826)。西郷方言は湘方言か贛方言かについて意見が分かれている。平江県は地域的に、湖南省(湘方言)、江西省(贛方言)、湖北省(西南官話)の交差地帯に位置しているため、その方言の分布が示す状況も複雑である。

平江城関方言の指示詞は“ i^{35} 、 ko^{35} 、 η^{33} ”の3系列であるが、その使用実態はまったく記述されていない。したがって、3つの指示詞の使い分けについて言及したものもない。唯一平江方言の指示詞に関する記述が見られるものは汪平他(1988)である。これは平江の東北郷方言の長寿方言についての研究であり、しかも現場指示の機能にしか言及されていない。本稿では長寿方言の記述を踏まえながら、平江城関方言の指示詞の機能をコンサルタント調査によって明らかにし、さらに方言口語コーパスを用いて検証を行う。声調に関しては、汪平他(1988)などの先行研究では調類で示しているが、本稿では調値で示すことに統一する。なお、漢語で書かれている先行研究の日本語訳及び例文のグロス筆者による。

2. 先行研究

本章ではまず上述した平江方言の中でも唯一指示詞について記述のある東北郷の長寿方言の研究をまとめる。その後は同じく贛方言の下位方言とされている江西省の宜春方言の指示詞に関する記述を紹介する。宜春方言の指示詞は平江城関方言と同じく3系列である。

2.1. 平江方言

汪平他(1988)は長寿方言における指示詞 $[i^3 \ ko^3 \ \eta^1]$ をそれぞれ近称、中称、遠称であるとし、その使い分けは下記のものであるとしている。 $[i^3 \ ko^3 \ \eta^1]$ は本稿での表記 $[i^{35} \ ko^{35} \ \eta^{33}]$ と対応する。

$[i^3 \ ko^3 \ \eta^1]$ を1つのみ用いる時、その選択基準は、もっとも近いものに $[i^3]$ 、比較的に近いものに $[\eta^1]$ 、遠くもなく近くもないものには $[ko^3]$ を用いるというものである。(中略)話し手の手に持っているものあるいは自分の立っている位置にあるものには $[i^3]$ を用い、 $[ko^3]$ は用いない。

遠い所にあるものを指すときは〔ko³〕も〔ŋ¹〕も可能であるが、〔ŋ¹〕を用いた場合、〔ko³〕より遠い感じを与える。

(汪平他 1988: 120)

場面別の用例は下記のようになる(汪平他 1988: 120)。

場面 1 子供が壊れたお碗を持ってお母さんに告げる場合：

i³⁵ 只碗烂过 ta。(这只碗破了) このお碗は壊れてしまった。

この場合は〔ko³⁵〕は使えない。

場面 2 ほかの人が着ている服を指している場合：

ko³⁵ 块衣落 nien¹¹ la 买 ko。(这件衣服在哪儿买的?) この服はどこで買ったの？

ŋ³³ 边山背只有一条小路。 あちらの山の裏には小道が一本しかない。

上述の説明は現場指示に限っての用法であり、城関方言においても大体あてはまるが、本稿では更に文脈指示等を含む用法を、実際の会話での指示詞の現れから調べる。

2.2. 宜春方言

大嶋広美(2004)は江西省宜春方言における 3 系列の指示代名詞の語用論を、日本語の指示詞との対照から分析している。大嶋広美(2004)ではまず宜春方言の指示詞は li3、ko3、le1 の三つであるとし、それぞれの機能を詳しく述べている。

まず、現場指示のうちの直示的指示については下記のように述べている。

li3 : 近いものを指す。対象物が可視のもの、話し手側の領域内にある場合に多用。

ko3 : 近い、やや近いものを指す。対象物が可視、不可視ともに使用可。話し手からあまり遠く離れていないところにいる聞き手側周辺のことを指すことに多く使われる傾向がある。不可視の場合、話し手・聞き手にとって対象物が既知のものに限る。

le1 : 遠いものを指す。対象物が可視・不可視ともに使用可。曖昧領域指示に使用。

(大嶋広美 2004: 74)

次に、現場指示における弁別的用法について次のように記述している。ここでいう弁別的指示とは具体的に定義されていないが、用例などからみて、二つ以上あるものをさす場合に、異なる指示詞を用いて区別することを指していると考えられる。

宜春方言の指示代名詞は、現場指示において、単に遠近の距離を表すという役割を持つだけでなく、等距離であろうと異なった距離であろうと、一度で複数のものを指している場合、距離に関係なく(極端に距離が離れている場合は除く)、話し手は今どれを指しているかを聞き手が理解しやすいように異なった指示代名詞を使う、つまり明示的に対象物を新規導入するための「標識」の機能を備えた指示代名詞でもあるといえる。

(大嶋広美 2004: 78)

文脈指示における照応用法は下記の表のようにまとめられている。

先行詞	ko3	lel
時間・空間以外	・話し手にとって強いかかわりの気持ちを持つもの、関係がある場合に使用。 ・指示代名詞が指す内容について話し手・聞き手は共に知っている。	・話し手には関心のない対象物に対して使用。また、話し手・聞き手双方が知っているが、心理的に遠ざけたいときに使用。 ・指示代名詞が指す内容については話し手だけが知っている。
空間	話し手・聞き手から近い、もしくはどちらか側から近いところを指す。	話し手・聞き手から遠い、もしくはどちらか側から遠いところを指す。
時間	(無)	聞き手の知識・認識の有無及び現時点からの時間的遠近に関係なく未来・過去の対象物を指すのに使われる。

(大嶋広美 2004: 85)

非照応的用法は下記の表のようにまとめられている。

ko3	lel
話し手・聞き手双方が対象物について知っている。	・話し手だけが知っている。 ・話し手・聞き手双方が認知している対象物 (婉曲表現及び対象物が話し手にとって嫌悪感を感じさせるもの)を指す時に使用。

(大嶋広美 2004: 85)

大嶋広美(2004: 85)における結論は下記の通りである。

宜春方言の3つの指示代名詞は、現場指示においては弁別的機能以外に範囲・位置(聞き手側を含む)を指し、距離間に応じてそれぞれの役割を持っている。しかし文脈指示においては、現場指示の場合と違って、ko3 と lel の2つの指示代名詞のみの使用に限られており、ko3 は専ら談話で導入された内容が話し手・聞き手の知識内に既に存在している場合に用いられる一方、lel は聞き手にとって既知の情報かどうか関係なく使用される傾向がある、といった様々な機能を持つ。宜春方言の指示代名詞は、空間・時間を除き、聞き手の対象物に対する既知の有無によって大きく作用しているといえよう。以上のことにより、「中称」指示代名詞と称されてきた ko3 は、話し手の聞き手に対する配慮として概念的知識の対象と捉える役目を担う他の近称・遠称指示代名詞とは異なった性質を持った指示代名詞であることが分かる。

(大嶋広美 2004: 85)

これによると、宜春方言における3系列の指示詞は単に近、中、遠称という違いなので

はなく、さらにさまざまな機能的な違いがある。これらの理由から、単に3種類の指示代名詞がある別の言語と同様に考えることは問題があることも指摘している。

3. 研究方法

まず大嶋広美(2004)の着眼点を参考にして、コンサルタント調査を行い、平江城関方言の指示詞の基本的機能を明らかにする。調査は2007年8月平江県三陽郷白簍村で行った。コンサルタントは1945年生まれで、白簍村以外には長い期間住んだことのない女性である。調査方法は、大嶋広美(2004)にある背景を説明し、調査者が似たような例文を作成して、コンサルタントに指示詞の使用を確認した。先行研究で可能であるとされていた指示詞が使えないと判断された場合、その代わりにどの指示詞が使われるのかを教えていただいた。

その後、筆者作成中の平江城関方言口語コーパス2(Pingjiang Dialect Colloquial Corpus、以下PDCC2と呼ぶ)から指示詞の用例を採集した。PDCC2は1万字あり、内容はすべて自然会話である。このコーパスについてさらに詳しい情報は張盛開(2006)を参照されたい。大嶋広美(2004)に倣い、PDCC2から抽出した指示詞*i*³⁵、*ko*³⁵、*ŋ*³³の用例を現場指示、文脈指示、非照応的用法に分類して考察する。分類が難しい場合は、更に収録時の状況と筆者の内省を加えて判断する。なお、PDCC2からの用例は例文番号に話者のイニシャルを付してある(01Yzh など)。明記したものを除き、イニシャルのない例文は上記のコンサルタントによる。

4. 考察

本章では主に大嶋広美(2004)の記述に倣い、指示詞の機能を現場指示、文脈指示、非照応的用法に分けて順番に考察していく。さらに、現場指示は直示的指示と弁別的指示、文脈指示は空間・時間以外における照応と空間・時間における照応に分ける。

以下で平江城関方言と宜春方言の指示詞を対照する際には、一般にそれぞれ近称、中称、遠称とされている「*i*³⁵-li3、*ko*³⁵-ko3、*ŋ*³³-le1」を対応させて分析する。

4.1. 現場指示

4.1.1. 直示的指示

まず直示的指示に関しては大嶋広美(2004: 74)で述べている用法に近いものもあるが、異なる用法も見られる。以下に用例をあげながら、平江城関方言の指示詞の直示的用法を説明する。

*i*³⁵に関してはほとんど宜春方言のli3の用法と同じ用法が見られる。*i*³⁵は「近いものを指す。対象物が可視のもので、話し手側の領域内にある場合に使用するもの」と定義できる。これは汪平他(1988: 120)にも見られるように、「話し手の手に持っているものあるいは自分の立っている位置にあるものには[i³]を用い、[ko³]は用いない」との記述と一致する。宜春方言では話し手の手に持っているパンに対し、li3のほか、ko3も使用可能である(大嶋広美 2004: 69)が、この場合に平江城関方言ではko³⁵を使用することはできず、*i*³⁵しか使えない。以下の例01と例02は話し手領域内のものを指している例である。

- 01 Yzh: $\eta o^{21} i^{35} son^{33} xai^{13} mai^{21} ti^{24} t^{h}ai^{22} \eta a^{55}$
 我 i^{35} 双 鞋 买 的 大 丫。
 私 i^{35} CL 靴 買う 結果 大きい 少し
 我这双鞋买得大些。
 私のこの靴はちょっと大きめのを買ったの。
- 02 Zny: $\eta o^{21} i^{35} ke^{24} \eta on^{21} ta^{24} \eta on^{55} ta^{24} ke^{24} tsin kia^{33} tsin^{35} to^{33}$
 我 i^{35} 格 按哒按哒 格、 尽 加 尽 多。
 1SG i^{35} PO 少しずつ押す PO すれば 足す するほど 多い
 我一点儿一点儿的比着加的、可越加越多(总是出错)。
 私は少しずつ押して足しているのに、足せば足すほど多くなる(毎回の値が違う)。

次に ko^{35} に関してであるが、 ko^{35} は「近い、やや近いものを指す。対象物が可視、不可視ともに使用可能である。話し手からあまり遠く離れていないところにある聞き手側周辺のもを指す場合に多く使われる傾向がある。曖昧領域指示に使用するもの」と定義できる。宜春方言と異なる点は曖昧領域でも使用されるという点である。曖昧領域の指示に宜春方言では lel が使用されるが、平江城関方言では ko^{35} が使用される。例 03 と例 04 は相手領域内にあるものを指す用例である。

- 03 Zsk: $\eta^{21} ko^{35} t\eta on^{33} \eta i^{21} mo^{13} li^{33} lo^{55}$
 你 ko^{35} 张 是 么哩 啰?
 2SG ko^{35} CL CO 何 PT
 你那张是什么?
 そちらのその一枚はなんなの?
- 04 Zsk: $\eta^{21} ko^{35} ke^{24} xai^{13} mau^{22} t\eta au^{55} ke^{24} le^{33}$
 你 ko^{35} 格 还 毛 照 格 呢。
 2SG ko^{35} PO まだ NEG 撮る PO PT
 你那些还没照的呢。
 そちらのはまだ撮ってないわよ。

例 05 は「お父さんはどこにいるの」と言っている子供への発話であるが、これは見つからないものや人物に対して「そこだろう」というような曖昧な答えである。

- 05 Zny: loʔ⁴ko³⁵ a²¹ a²²a²² loʔ⁴ ɲai³³tseʔ⁴foŋ¹³li³³ ʂi²¹ pəʔ⁴xiau³⁵ti⁴ loʔ⁴ nien²¹tiʔ⁴ʂø²¹
 落ko³⁵ 阿, 阿阿 落 炯嘖 房哩 是 不晓的 落 犖的 时。
 いる そこ PT いる ばあちゃん部屋 CO 知らない いる どこ CO
 在那儿、不知是在奶奶房里还是在哪儿。
 そこにいるだろう。おばあちゃんの部屋かどこかは知らないけど。

遠称とされているŋ³³は現場指示の場合はやはり遠いものを指す。対象物が可視・不可視ともに使用可能である。ただし、不可視の場合、話し手・聞き手にとって対象物が既知のものに限られると定義できる。それ以外に、会話の現場にいない第3者の領域のものに用いられる傾向があり、しばしば会話の現場にいない第3者の人称と共に現れる。宜春方言と異なるのは不可視の場合に、既知のものでなければならないという点である。例 06 は現場からは見えないお米を安く売っているところについての話である。PDCC2に見られた用例では現場から見えないものがほとんどであった。

- 06 Sf: la³³li³³ ɲ³³pien³³ keʔ⁴ tʰiau⁵⁵ su⁵⁵tʂoʔ⁴ a³³
 他哩 ɲ³³边 格 祟 4 角 啊?
 3PL ɲ³³ PO 米を売る 4 角(お金の単位) PT
 他们那边的祟4毛啊?
 彼らのところのお米は4角で売っているの?

- 07 Zsk: kʰu¹³taʔ⁴ɲ³³a²¹ mau¹³ nin¹³ ta⁵⁵ e²¹ ta³⁵ ma¹³tsioŋ⁵⁵ la²¹
 跼哒 ɲ³³阿毛 人 搭 渠 打 麻将 啦。
 いる ɲ³³ NEG 人 と 3SG する マーじゃん PT
 呆在那边儿没有人跟他打麻将呀。
 あちらに居たら彼とマーじゃんをする人が居ないから。

4.1.2. 弁別的指示

弁別的指示は汪平他(1998: 120)が述べているように、「近い、近くもなく遠くもない、遠い」という三つの段階で指示詞を使い分けるものである。一般に、目に見えるものが三つある場合、それぞれ近い順番から指示詞を用いて示す傾向がある。例 08 は近所の子供同士がそれぞれの家について話している時に現れた発話である。

- 08 i³⁵ ʂi²¹ ɲo²¹li³³ uʔ⁴li³³ ko³⁵ ʂi²¹ ɲ²¹li³³ uʔ⁴li³³ ɲ³³ ʂi²¹ e²¹li³³ uʔ⁴li³³
 是 我哩 屋哩、 ko³⁵ 是 你哩 屋哩、 ɲ³³ 是 渠哩 屋哩。
 i³⁵ CO EXC 家 ko³⁵ CO 2PL 家 ɲ³³ CO 3PL 家
 这是我家、那是你家、那边儿是他家。
 これは私の家、それはあなたの家、あれは彼の家です。

しかし、平江城関方言では、手の届く範囲内のものに対しては η^{33} は用いられない(例 12)。これは恐らく汪平他(1988: 120)で指摘されている「 $[\eta^1]$ を用いた場合、 $[\text{ko}^3]$ より遠い感じを与える」ことと関係していると思われる。実際に筆者の内省でも、 η^{33} を用いると、指しているものが非常に遠いものになってしまうように感じられる。この場合、手の届く範囲内であるため、遠い感じを与える η^{33} は適切ではなかったのであろう。例えば、机にあるもの(ノート、本、筆箱)を順番に指で指しながら説明する場合の発話は下記のようなになる(例 09、例 10、例 11)。この点に関しては宜春方言(大嶋広美 2004: 76 注 8)と異なっている。

- 09 i^{35} ʂi^{21} $\text{pən}^{35}\text{tsu}^{35}$ i^{35} ʂi^{21} ʂy^{33} i^{35} ʂi^{21} $\text{uən}^{13}\text{tʂ}^{\text{h}}\text{y}^{22}\text{xø}^{74}$
 i^{35} 是 本子、 i^{35} 是 书、 i^{35} 是 文具盒。
 i^{35} CO ノート i^{35} CO 本 i^{35} CO 筆箱

这是本子、这是书、这是文具盒。

これはノートで、これは本で、これは筆箱である。

- 10 i^{35} 是本子、 i^{35} 是书、 ko^{35} 是文具盒。
 11 i^{35} 是本子、 ko^{35} 是书、 ko^{35} 是文具盒。
 12 $*i^{35}$ 是本子、 ko^{35} 是书、 η^{33} 是文具盒。

さらに、地図上の地名を指で指す時の指示詞の現れについても同じことが言える。宜春方言では聞き手と話し手がなじんでいる地名かどうかによって指示詞を使い分けるようであるが、平江城関方言ではそのような使い分けは見られなかった。

以上で考察した平江城関方言での指示詞の用法を宜春方言と対照して表に示す。四角で囲んでいる部分は宜春方言と異なる点である。

表 1: 現場指示に関する方言間の対照

宜春方言		平江方言	
li3	近いものを指す。対象物が可視のもの、話し手側の領域内にある場合に多用。	近いものを指す。対象物が可視のもの、話し手側の領域内にある場合に使用する。	i^{35}
ko3	近い、やや近いものを指す。対象物が可視、不可視ともに使用可。話し手からあまり遠く離れていないところにいる聞き手側周辺のことを指すことに多く使われる傾向がある。不可視の場合、話し手・聞き手にとって対象物が既知のものに限る。	近い、やや近いものを指す。対象物が可視、不可視ともに使用可。話し手からあまり遠く離れていないところにいる聞き手側周辺のことを指すことに多く使われる傾向がある。 曖昧領域指示に使用。	ko^{35}

宜春方言		平江方言	
lel	遠いものを指す。対象物が可視・不可視ともに使用可。曖昧領域指示に使用。	遠いものを指す。対象物が可視・不可視ともに使用可。不可視の場合、話し手・聞き手にとって対象物が既知のものに限る。	ŋ ³³

4.2. 文脈指示

文脈指示の用法に関しても、大嶋広美(2004)に倣い、空間・時間以外における照応と空間・時間における照応の別に分けて考察する。

4.2.1. 空間・時間以外における照応

空間・時間以外における照応用法について、大嶋広美(2004)では前方照応と聞き手にとって既知のものかどうかとの2つの場合に分けて考察している。平江城関方言に関する調査結果は下記のようにまとめることができる。

前方照応は ko^{35} のみであり、聞き手の知っている情報の照応では i^{35} と ko^{35} が使用される。ただし i^{35} が使えたのは例13のみである。この例を見ると、先に話題に出ているものが既に頭にあるので、これを現場指示として考えることも可能かもしれない。しかし、具体的な対象が現場にないため、本稿ではこれを直前の語(“温故知新”)と照応しているものとして使われていると捉える。この場合、 i^{35} は「話し手にとってかかわりの気持ちを持つもの、関係がある場合に使用」と定義できる。

- 13 $uən^{33}ku^{55}tʂi^{33}sin^{33} i^{35} tʂy^{55} fa^{22}ʂi^{21} ʂy^{13} ua^{22}ke^{?4}$
 “温故知新” i^{35} 句 话 是 谁 话 格?
 “温故知新” i^{35} CL 文 CO 誰 話す PO
 “温故知新” 这句话是谁说的?
 “温故知新” ってこの言葉は誰が言ったんだっけ?

ko^{35} は「話し手にとってかかわりや関係があるかどうかを問わず」使用される。さらに「指示詞が指す内容について話し手・聞き手は共に知っている」ものでなければならない。たとえば次の例14がその例である。

- 14 $ŋ^{21} ts^h o^{?4} nin^{33} pa^{35} e^{21} ke^{?4} tʂə^{?4} tsu^{33} a^{33} ko^{35} ke^{?4} ŋo^{21} k^h ia^{?4} a^{55} ta^{?4}$
 你 昨日 把 渠 格 橘子 啊? ko^{35} 格 我 吃 啊哒。
 2SG 昨日 あげる 3SG PO みかん PT ko^{35} PO 1SG 食べる PF
 你昨天给他的橘子啊? 那东西我吃了。
 あなたが昨日彼にあげたミカン? あれは私が食べたよ。

さらに、話者の住んでいる地域から離れている場所、例えば広州に地震があったとして、「それは本当か？」と言いたい場合、宜春方言ではこのことに無関心な場合は **le1** で、それを身近な存在として感じている場合には **ko3** を用いる、となっている。しかし、このような場合、平江城関方言では **ko³⁵** しか用いることができない。

表 2: 照応的用法に関する方言間の対照

宜春 方言		先行 詞	平江方言	
ko3	le1		i ³⁵	ko ³⁵
・話し手にとって強いかわりの気持ちを持つもの、関係がある場合に使用。 ・指示代名詞が指す内容について話し手・聞き手は共に知っている。	・話し手には関心のない対象物に対して使用。また、話し手・聞き手双方が知っているが、心理的に遠ざけたいときに使用。 ・指示代名詞が指す内容については話し手だけが知っている。	空間・時間以外	話し手にとってかわりの気持ちを、関係がある場合に使用	話し手にとってかわりや関係があるかどうかを問わず使用される。 ・指示代名詞が指す内容については話し手と聞き手が共に知っている。

4.2.2. 空間・時間における照応

空間における照応用法は **ko³⁵** にしか見られない。たとえば、新しくできたお店の話をしてから、「そこに行ってご飯を食べよう！」と言いたいときには、例 15 のようになる。

- ŋo²¹fu⁵⁵ kh⁵⁵i⁵⁵ ko³⁵ a²¹ k^hiaʔ⁴fan²²
- 15 我伙 去 ko³⁵ 阿 吃饭。
- INC 行く ko³⁵ 阿 食事する
- 咱们去那儿吃饭。
- そこに行ってご飯を食べよう。

時間的照応に関しても **ko³⁵** のみ使用される。これは「聞き手の知識・認識の有無及び現時点からの時間的遠近に関係なく未来・過去の対象物を指すのに使われる」と定義できる。例 16 は同窓会でしばしば耳にする話で、学生時代は何でも食べることができたという過去の記憶についての説明である。例 17 は大嶋広美(2004: 82)の例文 31a と同じものである。例 16 と例 17 の状況では **ko³⁵** のみを使用される。しかし、例 17 の「来月」を「明日」に変えた場合、宜春方言では **le1** が使用できるようだが、平江城関方言では不自然(例 18)であると判断される。コンサルタントによると指示詞がない表現が自然であるという。

- ko³⁵ ko⁵⁵ ʂi¹³fən²² ʂi²¹ tʂən³³ k^hiaŋ²⁴ ti²⁴
 16 ko³ 个 时分 是 真 吃 的。
 ko³⁵ CL 時 CO 本当に 食べる 可能
 那时候可真能吃。
 あの時は本当によく食べたもんだ。

- xɑ²¹ko⁵⁵nyɑ²⁴ ts^hiŋ²⁴xau²² iəu²¹t^hien²²ien²¹ ko³⁵nin³³ ʂi²¹ ia²²li³³paŋ²⁴tien³³tʂən³³
 17 下个月 7号 有 电影, ko³ 日 是 夜里 8 点钟
 来月 7日 ある 映画 ko³⁵ 日 CO 夜 8時
 kia⁵⁵ʂi⁵⁵
 架式。
 始まる
 下个月7号有电影, 那天晚上8点开始。
 来月の7日には映画がある。その日の映画は夜8時から始まる。

- 18 *明朝7号有电影、ko³⁵日是夜里8点钟架式。

表 3: 時間と空間における照応に関する方言間の対照

宜春 方言		先行 詞	平江方言
ko ³	lel		ko ³⁵
・話し手・聞き手から近い、もしくはどちらか側から近いところを指す。	・話し手・聞き手から遠い、もしくはどちらか側から遠いところを指す。	空間	・話し手・聞き手から遠い、もしくはどちらか側から遠いところを指す。
(無)	・聞き手の知識・認識の有無及び現時点からの時間的遠近に関係なく未来・過去の対象物を指すのに使われる。	時間	聞き手の知識・認識の有無及び現時点からの時間的遠近に関係なく未来・過去の対象物を指すのに使われる

4.3. 非照応的用法—認識的用法

非照応的用法が見られるのはko³⁵とŋ³³のみである。

ko³⁵は「話し手・聞き手双方が対象物について知っている (婉曲表現及び対象物が話し手にとって嫌悪感を感じさせるもの)」と定義できる。例 19 は話し手が目の前にいる知っている子供について話しているにも関わらず、名前を使わずに聞き手に指示していることから、これを婉曲表現とみなす。

- 19 Zny: $t\dot{s}aŋ^{55}a^{22}ti^{?4}$ $ko^{35}ko^{55}nin^{13}iau^{55}$ $kh_i^{55}mai^{21}$ $t\dot{s}^h\alpha^{33}$ xan^{35} $\eta\alpha^{33}tse^{?4}$ ua^{22}
 正阿的 ko^{35} 个 人 要 去 买 车, 喊 X 丫 嘖 话
 さっき ko^{35} CL 人 ~たい 行く 買う 車 呼ぶ 人名 言う
 iau^{55} $kh_i^{55}xan^{55}$ $t\dot{s}^h\alpha^{33}$
 要 去 看 車。
 ~たい 行く 見る 車
 刚才那个人就要去买车, 叫 X 说要去看车。
 さっきから、その子は車(おもちゃ)を買いに行きたいって、X に車を見に行きた
 いたいって言ってた。

対象物が話し手にとって嫌悪感を感じさせるような表現は例 20 のようになる。

- 20 $ko^{35}ko^{55}$ $nin^{13}iau^{22}$ $lai^{13}ta^{?4}$
 ko^{35} CL 人 又 来哒。
 ko^{35} CL 人 また 来る PF
 那个人又来了。
 あいつはまた来たよ。

η^{33} は話し手・聞き手双方が認知している対象物を指す時に使用するものと定義できる。これは筆者が実際の会話で聞いた用例に基づき判断したものである。例 21 は筆者の祖母が祖父に対して発話したものである。問題となっている鶏は、祖父と祖母にとって既知のものである。

- 21 $mo^{?4}$ $tso^{?4}$ η^{33} $t\dot{s}\alpha^{?4}$ ki^{33} le^{33}
 莫 捉 η^1 只 鸡 呢。
 NEG 捕らえる η^{33} CL 鶏 PT
 別捉那只鸡。
 あの鶏は捕まえないでね。

表 4: 非照応的用法に関する方言間の対照

宜春方言		平江方言	
ko3	le1	ko35	η^{33}
話し手・聞き手双方が対象物について知っている。	話し手だけが知っている。 話し手・聞き手双方が認知している対象物 (婉曲表現及び対象物が話し手にとって嫌悪感を感じさせるもの)を指す時に使用。	話し手・聞き手双方が対象物について知っている。(婉曲表現及び対象物が話し手にとって嫌悪感を感じさせるもの)	話し手・聞き手双方が認知している対象物を指す時に使用する

5. 終わりに

PDCC2 における i^{35} 、 ko^{35} 、 η^{33} の用例数は表 5 の通りである。なお 0^* に関しては、PDCC2 では用例が見られなかったが、実際の生活で用例が確認できたものである。例えば例 21 がその例である。「判」とはコンサルタントによる判定結果である。

表 5: PDCC2 に見られる指示詞の用例詳細

		i^{35}	判	ko^{35}	判	η^{33}	判
現場指示	直示指示	117	○	23	○	11	○
	弁別指示	1	○	1	○	1	○
文脈指示	空間・時間以外における照応	4	○	32	○	0	×
	空間・時間における照応	0	×	4	○	0	×
非照応(認識的指示)		0	×	1	○	0^*	不明
合計		122		61		12	

このように、平江城関方言における 3 系列の指示詞の使用には偏りがみられることがわかる。

現場指示に関しては、3 系列ともに使用されるが、使用頻度が高く、使用範囲も広いものは i^{35} と ko^{35} であり、 η^{33} はもっぱら遠い可視のものか、不可視のものかあるいは弁別的指示の場合の例のみである。文脈指示に関しては ko^{35} の用法がもっとも広く、すべての照応に使用される。 i^{35} は時間と空間以外の照応にのみ使用される。 η^{33} は使用されない。

非照応的用法には ko^{35} と η^{33} が用いられ、 i^{35} は使用されない。

以上の結果にみられるように平江城関方言における 3 つの指示詞は単に距離で区分することはできない。確かに、現場指示においては先行研究で言われているように「近、中、遠」に分けることはできるが、文脈指示などでは、このような区分の仕方は不適切である。これは宜春方言の指示詞と同様である(大嶋広美 2004: 85)。そこで筆者は平江城関方言における 3 系列の指示詞の現場指示機能について、以下のような使い分けになっているものと整理した。

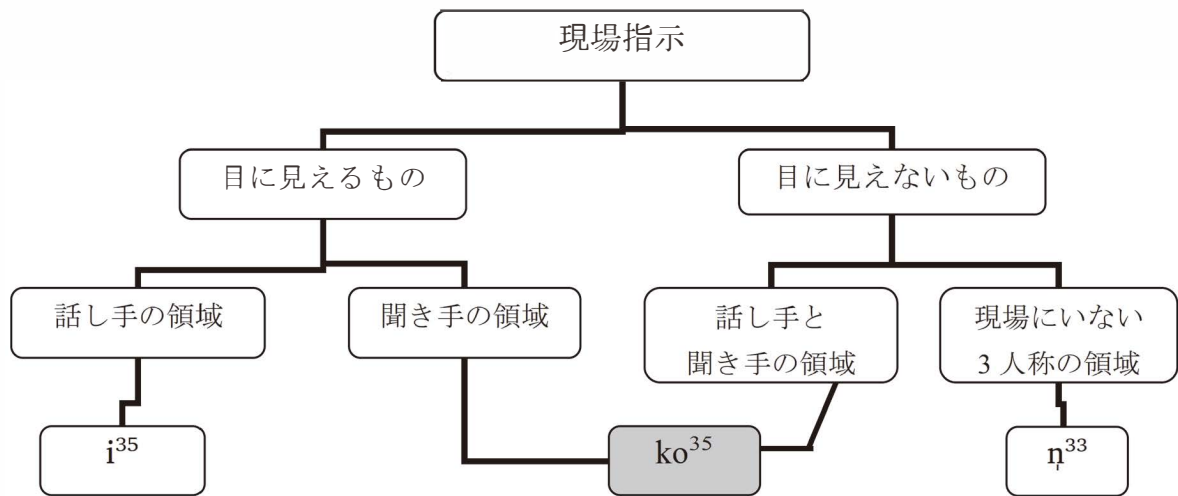


図 1 平江城関方言における指示詞の使い分け

今後はその他の漢語諸方言における指示詞の使用実態を調べたいと考えている。さらに、平江のその他の下位方言についても詳しく調査する必要がある。

略語一覧

CL	Classifier	NEG	Negative	SG	Singular
CO	Copula	PF	Perfect	TO	Topic
DM	Diminutive	PL	Plural	1、2、3	Pronoun
EXC	Exclusive	PT	Particle		
INC	Inclusive	PO	Possessive		

参考文献

湖南省地方志编纂委员会编 2001「平江方言」 『湖南省志第二十五卷方言志 上册』：826-891. 湖南人民出版社：长沙.

大嶋広美 2004「中国江西省宜春方言の指示代名詞の機能」 『マテシス・マニウェルサリス』第6巻 第1号：66-86. 獨協大学外国語学部言語文化学科.

汪平・李崇兴・蒋平 1988「平江长寿方言的语音语法特点」 『语文论集』(三): 107-127. 外语教学与研究出版社:北京.

張盛開 2006「湖南平江方言の「虚義動詞」について」 敦賀陽一郎・三宅登之・川口裕司編『言語情報学研究報告 12』：71-96. 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学大学院地域文化研究科.

張盛開 2007「平江城関方言の指示詞について」日本中国語学会第 57 回全国大会予稿集.

平江城関方言の指示詞について

要 旨

本稿は平江城関方言における3系列の指示詞(“i³⁵、ko³⁵、ŋ³³”)の使い分けについて考察した。考察にあたって、同じく3系列指示詞を持っている日本語と贛語宜春方言の対照研究を行った論文を参照する。まずコンサルタント調査により平江城関方言における3系列の指示詞の基本的な用法を明らかにする。その後、筆者自作の方言口語コーパスから、指示詞の用例を抽出し、それぞれの指示詞の用法を確認する。考察結果では平江城関方言における3系列の指示詞の使用には偏りが見られることを指摘する。現場指示に関しては、3系列ともに使用されるが、使用頻度が高く、使用範囲も広いものはi³⁵とko³⁵である。文脈指示に関してはko³⁵の使用範囲がもっとも広く、すべての照応に使用される。ŋ³³は使用されない。非照応的用法にはko³⁵とŋ³³が用いられ、i³⁵は使用されない。最後に3系列の指示詞の現場指示における使い分けを筆者は改めて分類した。

关于平江城关方言的指示词

提要

本论文考察了平江城关方言的3套指示词的用法及其区别。考察时,参考了对同样有3套指示词的贛语宜春方言跟日语进行对照的相关论文。考察过程中、笔者先通过向发音合作者进行调查、探明了平江城关方言的3套指示词的基本用法。然后,笔者从自己制作的方言口语语料中收集3套指示词的例句,进一步对调查结果进行了证实。结果表明,平江城关方言虽然有3套指示代词,但其使用并不平衡。关于现场指示,3套指示代词都可以使用,但使用频率高、适用范围广的为i³⁵和ko³⁵。关于跟前后语境对应的指示,ko³⁵的用法最宽,可以用于所有的用法。没有语境对应的指示,只用ko³⁵和ŋ³³,不用i³⁵。最后笔者对3套指示词的现场指示用法区别重新进行了分类。

关键词

平江城关方言、指示词、现场指示、对应指示、非对应指示